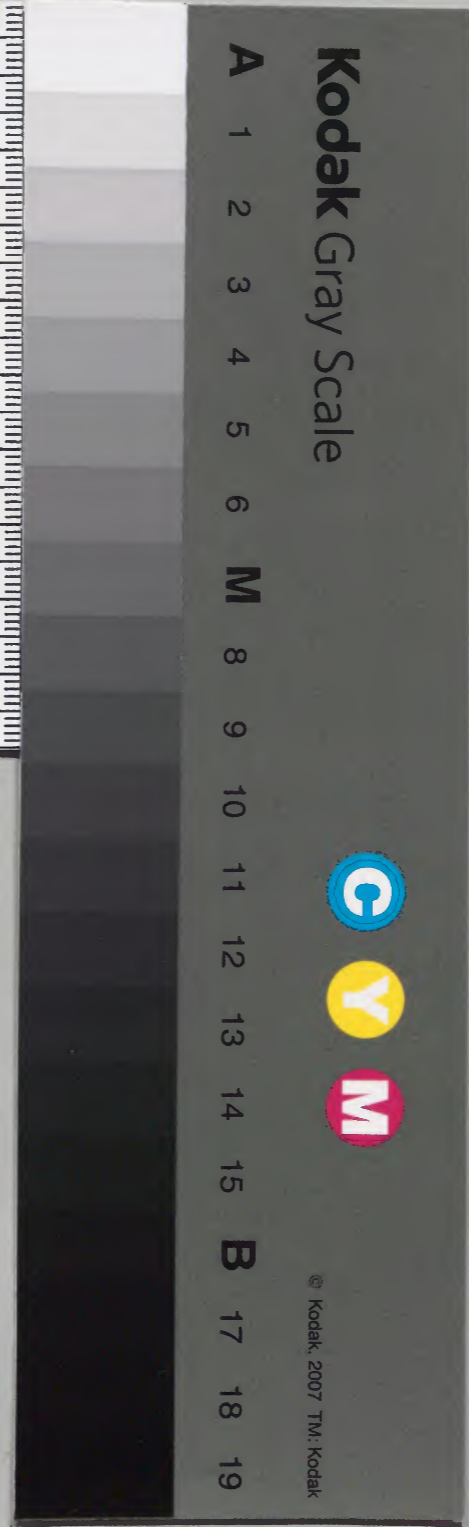


續
近世時人傳

和書門	一六〇一	函架	類
	一四六一		
	一〇		

內閣文庫	和書類
一六〇一	函架
一四六一	
一〇	

內閣文庫	
番號	和 16001
冊數	10 (9)
函號	158 150



信
書

詩
書

續近世時人傳卷之四

僧 田山 僧僧老度僧月

町田久成獻納之章

田山和尙の備後の人にして却して家産といふの欲も佛
 又仕へ終ぬとるに性敏悟亮達りて後文と稱し。
 字りて詩人と作る。又母をいふよりせり月舟を尙
 及してを家とす。十三歳の時亡父乃養を承りてある
 についで母をよと抱て回。海人そまをせんとと教へん。
 宗音と名とせり。わたりし。もて勿と示す。と。
 中流の急流に舟よとせり。九歳の時父のやとる
 おりり。舟の舟舟を舟よとせり。舟舟の舟の舟を
 舟舟の舟舟よとせり。舟舟の舟舟の舟舟の舟舟
 が忽とせり。舟舟の舟舟の舟舟の舟舟の舟舟

只期山澤互通氣

同是双虚受物也

かの六くもれんと志れりまう。然ふふ殿山を辨江社
 玉のふふりり。昔加家乃諸大寺に命下りてれん成
 知し流弊と志しられちよほる。以親王孫よそ内と慕
 ひるまうして。是元禄七年八月吉のしあふ。けり
 人れと誓われり。二十二年あて全成。此後自慢たる人
 それられ。清人輩愛して復古綠林の類と稱り。正徳
 六年しふ守り。句うと。涼光庵よ遷行。然ふ。周中
 那任錦が焼く碑又果して石よ備へばふ建る。

光願云。法眼和尚のれり。十八年と終る。天和
 九年辛酉人截徑彫刻成り。是れふ山の蔵一。なる
 寺中へ。前編和尚の情よ具と。云。慶と人。河内

くと。南都東大寺龍松院よ。然ふ。此ふ。大
 佛殿。天年勝齋。四年。聖武天皇の物れ。是
 三。し。と。四百二十。を。高倉院。法承。心
 三月廿八日。午。を。勸乃。兵。火。より。り。後。養。和
 元年。醍醐。乃。俊。仍。坊。重。源。と。人。大。物。を。さ。り。と
 後。白。河。院。録。念。石。幕。下。に。物。し。然。の。建。久。六。年。再
 ひ。就。回。り。三月。廿。日。さ。り。二。の。事。石。幕。下。も。未。信
 あり。さ。り。三。百。七。十。三。の。と。終。る。永。祿。十。三。の。月。十。日。相。水
 傳。心。之。者。兵。火。より。焼。失。れ。け。付。附。着。り。此。の。處。に
 と。大。和。福。任。の。處。士。山。田。乃。也。又。画。の。所。も。多。く。財
 宝。と。出。て。佛。頭。と。海。老。よ。入。り。し。と。傳。心。の。所。も。
 其。處。の。真。ち。ふ。及。び。け。高。後。白。河。院。九。年。圓。宗。元。生。乃
 記。あり。新。中。に。さ。り。す。れ。り。

あるけと人々たんと無_しく。貞享帝乃物と傳_し。
宝永又平六月六日汝物と。人権那茂濟の太子
少_く。曼荼羅理付益今川法_もとも供_もたる。これ又
希_ふられ久_し與_ふなり。三師の志_もに針_も又_も平_ふ
一_し各_も法_も就_すと遂_にられ_れた_ること_も一_つと_も

問_ふ公月舟和尚_の言_ふある言_ふの言_ふ僧_の言_ふの言_ふ印_よ付_す
也_も其_の入_られ_しそ_の師_の言_ふの言_ふり_の出家_入物_とも_も也_も
は_も母_の儀_と傳_へれ_る言_ふる_も也_もり_の言_ふと_もも_も
然_る也_も母_の儀_とあり_し也_も言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ傳_へる_も
一_し傳_へた_る言_ふの言_ふ何_れの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふも_も
い_はれ_し也_も母_の儀_と傳_へて_おる_も傳_へる_も也_も海_の言_ふの言_ふ
も_も也_もり_の言_ふも_も言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふも_も

も_も公_のあ_らわ_る言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ一人_の僧_の言_ふの言_ふも_も
す_しと_もり_の言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふも_も
成_仏の言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ其_の機_如の言_ふの言_ふも_も
ふ_も言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ一旦_隠え_し禪_師の言_ふの言_ふ
也_も天下_の禪_林の言_ふの言_ふ海_家の言_ふの言_ふ門_とい_はれ_り
也_も徒_の言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ也_も
也_も宗_を持_持し_て言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふも_も
も_もれ_りも_もの言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ也_も言_ふの言_ふも_も
も_もれ_りも_もの言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ也_も

備南谷 附松平豊長

釋_取付_字の言_ふの言_ふ初_美の言_ふの言_ふ傳_へた_る言_ふの言_ふ
也_も公_の傳_へた_る言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふも_も
也_も公_の傳_へた_る言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふ言_ふの言_ふも_も

徳山公伝

わつらりてやよび諸位論と諸師よりきくしぬ事と云
 うる事。年二十に華の美疏書字の事と記し。山門の靈
 宣律師ふつりて海縁と雲り。はゆれ寓なうして令く
 まつらりて通判八十奉く。可ふ山王乃紫り。よひ遠近の人
 嚮ふ諸と云ふ。うり師一字と不出。嚮字未あつり。
 子勉修若きし。此年と云ひて多國院より梵
 網經古蹟と漢さし。法古の後ふひひ梵經
 百と云ふ。并りて涼廟徑基五の乃無後と云ふ志
 と云ふ事。なかりて院と稱し。山門の事ふ一系と云
 結びた年きくさうり。堂記及び正度の辨と著す。
 片、六年のほえ祿丙子の事。海の流況の事
 志より無後乃云の再任と云ふ。額五と云ふ。又多國

院ふつり。越代の位と云ふ。は月ふけ。時の控門 ね事
 美濃侯ふつりて廟の事由と記し。國定廿の年丁丑
 九月後古れ若志を記すをさうしてさうらふ。美濃侯
 曰。凡京師の寺。改め京師とて遷す。是し極極なり
 と。さふ事。極と云ふ。京師中平紀作。是れ
 事状と云ふ。此のり。極の事と涼廟。掃く。若
 時運未。其の自受病。速波。再ありて。れんと。遂ん。と
 ふ事。此或の事。や。此年己卯十月。有日あり。廟社あり
 門。應の事。と云ふ。一般。後。此月又の事。美濃
 卿。涼院。一枕夢。臨地。窺半。惠。又。一餅。句と。傳
 自。越。此。事。と。云ふ。是。庚辰。四月。六。孫王。正。一。位。推
 現の勅許。を。用。し。り。も。此。室。に。十。五。と。奉。祀。し。る。事。ナ

二月二十日新殿遷座の儀成。勅使あり。辛巳八月
廿八日 大御君六孫王権現の五人字と御名を
御して御入す。水戸黄門光圀御も子女と御入

六孫王御墳墓年久廢頽之處。今度新
佛修葺せし中。御重く事なす。祇源家氏御修
と御無業御事過之御事。御修に同補文旨
人一同奉存い事なす。御修一人多
信仰せし。御修に御修一人多
御修者源家く御修。御修に御修一人多
多御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多

此院も多御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多

光圀

法眼在庵医伯

御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多
御修に御修。御修に御修一人多

八月十六日

光園

通照院

蒙慈高
親臣下

宗永丁亥四月六日又命りり。廩米万石と賜ひ奈社
 の料となす所なり。又中古に及ぶ尤の糶糶せしむ
 古紙と扱ひ。きとふ成り果て月々系物有哉用
 ともして蔵に任せし御。龍顔。れ向ふ不易の肩
 剛く入ふ林虎と再造し。銀の山門の波狭とす。ま
 りく。果てさすた。あ社や。顔。のふぬ。後乃志
 と起し。又ふたにせし。京保度成業又月十九日。寺社
 目下。信法侯より。命令とぬひ。且命り。此令にも
 とし。い。なる。假筆の料と。い。い。母の。

乃。信。の。乃。亮。於。是。廩。社。令。善。ま。と。受。

壬子。又。い。産。に。も。よ。保。と。御。且。新。画。

乃。林。凱。と。加。納。遠。に。候。ふ。是。候。舟。体。一。獨。

是。之。可。忽。ふ。際。よ。火。起。候。の。案。に。い。ん。と。せ。

保。西。内。守。り。火。と。移。一。致。も。觸。

乃。甲。亥。果。止。月。太子。降。誕。

教。と。納。り。地。と。ト。と。た。此。心。を。に。わ。り。さ。

乃。村。下。に。納。り。さ。り。と。く。物。の。其。社。

十日。初。と。紫。衣。と。賜。ふ。師。は。よ。不。行。乃。倒。

且。い。ら。果。と。除。く。之。の。い。に。成。ぬ。凡。と。海。の。奇。地。

の。あり。て。毫。も。身。乃。あ。ま。ら。ん。と。お。ま。

又。ふ。都。ふ。近。得。見。の。時。奉。者。も。あ。と。い。

南宮は好まらざるに、龍遇ふも、入る友乃弟う
 て宿守と申し、中宮も其れなり、湖沼其れを
 し、く、千石、海軍と需人、神とつ、たま、乃、夏、秋と
 辨し、ぬ、平、托、よ、林、院、よ、く、ね、た、龍、歌、の、計、と、し、
 款、吾、天、の、浴、池、地、と、修、す、る、一、百、五、十、日、後、來、れ、如、業
 み、ま、の、如、護、よ、ら、る、を、ま、し、く、結、氣、の、り、り、病、罹
 く、よ、由、儀、と、辨、と、る、く、け、眼、下、に、倍、取、ま、く、痛
 と、よ、し、呻、く、く、我、病、業、と、く、ん、也、ま、の、信、と、ま、ま、
 精、冷、脈、で、わ、た、し、け、眼、吊、診、と、申、令、く、醫、ふ、業、の
 の、千、よ、ち、あ、ら、る、に、一、日、差、中、深、處、ふ、ま、ら、る、子
 て、ま、い、兜、率、之、の、莊、者、の、く、く、神、美、く、ま、ま、
 ま、し、ら、る、を、解、め、た、ら、ふ、事、と、り、ら、

陰末剛隆。晴末別時。思家降去。天胡月消

あ、く、子、祥、を、記、し、ぬ、く、ま、ら、ら、く、我、今、ま、ま、と、ま、ま、
 托、托、の、く、く、く、さ、う、わ、と、ま、ま、社、事、ふ、わ、て、大、君、く、れ、と、ま、ま、
 元、ま、ま、海、し、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 け、ま、の、林、社、と、申、終、り、結、せ、て、病、と、春、竹、七、十、四
 え、又、え、而、辰、末、十、月、一、日、午、時、に、師、生、信、三、帝、乃、
 恩、報、と、ま、り、龍、顔、と、辨、す、る、お、南、宮、よ、あ、ま、の、り、り、
 前後、ま、九、夜、一、人、君、の、龍、遇、と、ま、し、加、之、月、令、中、
 若、又、之、家、一、下、思、緒、差、旗、下、乃、士、の、帰、依、奉、け、記
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 日、必、若、ぬ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
 日、必、若、ぬ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

意のほりゆの...たす... 小兒の園獲活

言入る... 親かれた令く自己の... 甚し

は... 園... 甚し

ひ... 甚し

るは但老後の... 甚し

あく... 甚し

の... 甚し

く... 甚し

一... 甚し

... 甚し

浦... 甚し

そ... 甚し

中... 甚し

り... 甚し

... 甚し

... 甚し

... 甚し

... 甚し

... 甚し

... 甚し

... 甚し

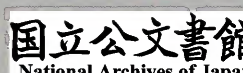
... 甚し

... 甚し

堀部金丸女

赤穂の先を法政差の家は堀部孫ま信金丸女
 幸とつゝ安き名成庸とまらひてしむる處せんせ一何
 止し後世の筆に及び。又令ぬまま成庸丸に頭母とつ
 ちむれよのあつち。可ふ幸女母よはし後筆の志を諸國の
 ても信と。おのよひみ伊勢ねはして幸をいりて
 とて。うらひとさう。またのほりては。よとふいと
 一とよよとよよとよよと一幸女伯父の信の孫のきよあつ
 とらりて。尾ふるん。おのひもも。も。も。も。も。も。
 よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。よ。
 所。所。所。所。所。所。所。所。所。所。所。所。所。所。所。所。
 事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。事。

後もあはと名つ可い。むむむむむむむむむむむむむ
 又まの。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。あ。
 ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。ね。
 作。作。作。作。作。作。作。作。作。作。作。作。作。作。作。作。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。
 一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。一。



人々の心を動かすことには、
誠意と敬意を込めて、
話し掛けることが大切である。
また、相手の立場を理解し、
共感を持って接することが、
人間関係を円滑にする鍵となる。
これらを実践することで、
お互いの信頼が積み重ねられ、
協力関係を築くことができる。
最終的には、お互いの利益を
追求しながら、社会の発展に
貢献することができるのである。

論議 華 舞 女

舞女は、古くから日本の
文化を代表する存在であり、
その姿容と舞踏は、人々の
心を魅了してきた。しかし、
近代化の進むにつれて、
舞女の地位や役割は大きく
変化した。かつては、舞女は
単に娯楽を提供する存在で
なく、また、社会の風俗を
反映する鏡とも捉えられて
いた。現代では、舞女は
エンターテインメント産業の
重要な一環として、大衆文化
の一部として位置づけられて
いる。その一方で、舞女は
依然として、日本の伝統文化
を継承する重要な役割を
果たしている。舞女は、
日本の歴史と文化を語る上で
欠かせない存在である。

Handwritten text at the top of the page, likely a title or header.

Handwritten title or section header in the center of the page.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Second main section of handwritten text on the right page, continuing the narrative or list.

Main body of handwritten text on the left page, continuing the narrative or list.



Vertical text on the right side of the book cover, likely a title or author's name, written in a traditional East Asian script (possibly Japanese or Chinese). The text is faint and difficult to read due to fading and the texture of the paper.

